

企画・編集：西村元喜 京都中部総合医療センター 放射線科

序 説

「子どもは小さな大人ではない」この言葉は小児科学の教科書の冒頭にしばしば記載されています。これは17世紀のフランスの啓蒙思想家ジャン＝ジャック・ルソーが掲げた教育論『エミール』で説かれた言葉であり、17世紀までの子どもは未成熟な大人として扱われていたことに対して、子どもには子ども時代という特別で固有な世界を有しており、それに適した対応が必要になるという趣旨の一種のアンチテーゼとして述べられています。

放射線診断学・核医学の領域においても小児は成人のミニチュアではなく、

- ・小児は成長・発達の段階にあり、正常像も年齢とともにダイナミックに変化していく。
- ・頻度の高い疾患も成人と大きく異なり、これらも年齢とともに変化していく。
- ・成人と比較して放射線に対する感受性が高い。

といった特徴を有しています。

Image Gently Alliance は2007年に米 国 小 児 放 射 線 学 会(Society for Pediatric Radiology ; SPR), 米 国 放 射 線 専 門 医 会(American College of Radiology ; ACR), 米 国 診 療 放 射 線 技 師 会(American Society of Radiologic Technologists ; ASRT), 米 国 医 学 物 理 士 協 会(American Association of Physicists in Medicine ; AAPM)の4組織を母体として設立された団体であり、小児の医療被ばく低減を推進する世界規模のキャンペーンを展開しています。安全で質の高い小児画像診断を世界中に提供することを目的としており、核医学領域では2008年より米国核医学会(Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging ; SNMMI)が加盟、日本国内からは2017年より日本小児放射線学会(Japanese Society of Pediatric Radiology ; JSPR), 2018年より日本放射線専門医会(Japanese College of Radiology ; JCR)の2つの組織が加盟しています。「Image Gently」, 「One size does not fit all」, 「Go with the Guidelines !」を合言葉として活動が行われ、この10数年の間に小児放射線診断学・核医学の標準化がグローバルに進展してきました。

わが国においても小児に対する核医学検査・PET検査は幅広く実施されており、日常診療のなかで重要な役割を果たしています。しかしながら、

- ・国内の小児専門病院でPET装置を保有する施設はなく、核医学専門医の数も限られている。
- ・総合病院では小児患者に対する検査数が相対的に少ない。
- ・主診療科の専門分化の影響を受け、施設ごとの疾患群の偏りが比較的大きい。

といった問題点があり、小児核医学検査全般について網羅的な経験を積むことはなかなか難しいのが現状です。そのため小児核医学検査に対して放射線診断専門医・核医学専門医ともに苦手意識のある医師も少なくないと考えます。

そのような背景を踏まえて、本特集では各領域のエキスパートに執筆をお願いし、それぞれの施設がもっている小児核医学検査に関するノウハウを読者の皆様と共有することを目的として企画させていただきました。本特集が明日からの皆様の診療の一助となれば幸いです。最後にお忙しいなかで執筆をいただいた先生方に心より感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

西村元喜